



高校野球のマナーとルールを学ぼう (第47回)



一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

グラウンドでの試合を振り返り、高校野球の大切なマナーとルールを学びましょう。
あなたの「なぜ? どうして?」にわかりやすくお答えしていきます。

マナー編 本塁周辺の白線で示される半円形の大きさは?

試合前のグラウンド整備も済み、ラインもきれいに引かれました。円形が少し大きく感じられたのですが…。

校庭での練習試合のことです。担当した選手に確認すると、「球場と同じぐらいだと思います」と回答がありました。ダートサークルと呼ばれる半円形の場所が明示されたのは2007年の開季からです。第3ストライクを宣告されただけで、まだアウトになっていない「振り逃げ可能な」打者が一塁に走ろうとせずにダートサークルを出た場合、球審は直ちにアウトを宣告する根拠になっています。→規則6・09(b)

人工芝を除いて内野全面が土の球場が多い日本では、何らかの基準が必要となり明確化のためにラインを引いたのです。大きさは規則書に例示される26フィートを採用しています。大きさは直径約7.92メートル(半径では3.96メートル)です。11月に甲子園球場で開催された日米野球では、プロ野球で初めてダートサークルが明示され、その内側とマウンドの赤土が印象的でした。県大会の会場の一つとなる(神戸ほっともっとフィールド)は内野が芝生の大リーグ仕様です。そのために半径が約5メートルのダートサークルとなっています。校庭ではアマチュア野球で規定される上記の数字を正しく守ってください。



ルール編 打者と走者の安全進塁権

悪送球がベンチなどに入った時に、「1(ワン)ベース、1ベース」とアピールする声が気になります。

規則7・05は打者と走者の安全進塁に関わる条項です。その中で1ベース=1個の塁が与えられるのは、「投手の(く)投球)か(く)投手板上からの送球)がスタンドやベンチに入った場合」が日常的でしょう。

野手の悪送球で起こり得るのは、7・05の(g)と(h)に関わる2(ツー)ベースの安全進塁とされます。

送球がポールデッドの箇所に入った時の2ベースの規定です。

①打球処理直後の内野手の最初のプレイに基づく悪送球の場合。

⇒投手の投球当時の各走者の位置を基準とする。

②その他の場合

⇒悪送球が野手の手を離れたときの各走者の位置を基準とする。

悪送球が野手の手を離れたときとは、文字通り「その送球をした野手の手からボールが離れたとき」です。また、打球を処理した内野手の最初のプレイが悪送球となった場合でも、打者を含む各走者が少なくとも1個の塁をすでに進んでいたときは、悪送球が内野手の手を離れたときの位置が基準となります。

何らかのプレイを企てたが実際には送球しなければ「その他の場合」です。また、外野手の悪送球は、すべて「その他の場合」として扱われます。

校庭では十分なスペースが無く、特別にグラウンドルールを設ける場合もあるでしょう。ただ、間違っても「悪送球で一塁に生きる打者走者が、規則で二塁を許されること」を「1ベース、1ベース!」などと言わないことです。思わぬところで規則を誤解する原因になってしまいます。